
【特集】「1968年」と社会運動の高揚（1）

特集にあたって

鈴木 玲

1960年代後半は、ベトナム反戦運動、全共闘を中心とした学生運動、公害反対運動などの社会運動が活発化した。これらの社会運動は、左翼政党や労働運動などの既存左翼勢力からは自律性あるいは対立関係をもちながら発展し、日本のアメリカ冷戦戦略への加担、大学当局の非民主的なガバナンス、急速な経済発展や都市化の負の側面などに対してデモ、座り込み、ストライキ、占拠などを通じ強い異議を唱えた。これらの運動は個々の領域で展開したのではなく、運動領域を超えて形成された運動思想、運動戦略、人的交流などを基盤に展開した。欧米の社会運動も同時期に盛り上がりを見せ、「1968年」が、日本や欧米諸国の社会運動がとくに高揚した年として象徴的意味をもつようになった。

本特集『「1968年」と社会運動の高揚』は、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）と学生運動をそれぞれ中心にあつかう論文、およびベトナム反戦運動の影響下における労働運動の動向をあつかう論文を掲載する。本特集の論文は、60年代後半に活発化した社会運動を網羅的にカバーできないが（例えば、公害反対運動をあつかうことができなかった）、運動参加者の聞き取りや回顧をもとに歴史学や社会学の視点から運動を分析し、市民運動と「政治集団」との関係、個人史と社会運動とのつながり、運動文化の形成、社会運動の高揚の既存の運動への影響など、社会運動の諸側面に光を当てる。近年、60年代後半の社会運動を対象とした社会・人文科学分野の研究が蓄積されつつあるが、本特集の論文はこの研究分野に新たな知見を加えるものと考えられる。

（すずき・あきら 法政大学大原社会問題研究所所長 教授）